

編集委員が選んだ本

『わがままに生きる哲学—ソクラテスたちの人生相談』  
多世代文化工房／はるか書房／2016年4月／1700円(税別)

「私は社会の落ちこぼれなのでしょうか?」「ブラック企業に勤めていて、軽く絶望しています」といった質問に回答するスタイルの本であるが、特徴的なのが、1つの質問に複数人で答えていることと、回答者が哲学を研究する大学や高校の教員であることだ。そこが普通の人生相談と違う面白いところで、本を読み進めていくと複数人の様々な価値観が示されていて、自分の固定観念に気づかされる。問い自体は老若男女から発せられたものだが、それを高校生に、複数ある回答のうちどれがよりよいものか吟味させて、発表し合い、さらに問いを立てるという授業ができそうだ。

『立憲デモクラシー講座 憲法と民主主義を学びなおす』山口二郎・杉田敦・長谷部恭男／岩波書店／  
2016年6月／1800円(税別)

「立憲デモクラシーの会」が2015年11月から翌年3月まで開催した講座が元になり、一部書き下ろしだが、講演録を文字に起こしたのもなので、論旨は明確であり、一つの章が短くて読みやすい。そのような性格なので立憲主義の危機を端的に明示し、それでいて高校生でも読むことのできる平易な表現で書かれている。いずれも著名な論者が執筆しており、非常に贅沢な本だ。危機を叫ぶには勇気が要る。その勇気を与えてくれるだろう。

『日本史のまめまめしい知識 第1巻』  
日本史史料研究会／岩田書院／2016年5月／1000円(税別)

主に日本中世史を研究する総勢33名が有名でない史実を取り上げて、コラムのように短文で、中世社会の一端を明らかにしている。執筆者の多くが1960～80年代生まれの若手である点が独特だ。本書は日本史の授業で小ネタ的に語られるようなエピソード集というわけではない。執筆者によってではあるが、無名の史実から中世の社会構造の把握に切り込んでいる。本書は教科書で詳らかでないところがわかったり、政治や戦争の背景をより深く理解するための事実を知ったりすることができる点で有用だ。経済や文化についての論考は少ないが、政治史的な内容については厚い。

『高校生の参加と共同による主権者教育  
生徒会活動・部活動・地域活動でシティズンシップを』

宮下与兵衛／かもがわ出版／2016年4月／  
1500円(税別)

「主権者教育」が首相、総務省、文科省などから声高に叫ばれても違和感をおぼえる。もやもやしてきたが、本書で霧が晴れた。服装や頭髮指導など、この国の多くの教育現場では、子どもの意見表明権すら保障されていないが、それはなぜか。明治憲法下でドイツから輸入された「特別権力関係論」によるものだという。ところが本家のドイツでは1973年にそれは否定され、小学校5年生(!)から生徒代表が学校の最高決議機関に参加しているという。日本でも高校生たちが学校づくり、地域づくりに参加して、主権者意識が高まった実践例が豊富に紹介されていて「目から鱗が落ちる」思いで読んだ。ご一読をお薦めする。

『SEALD<sup>S</sup> 民主主義ってこれだ!』  
SEALD<sup>S</sup> 編／大月書店／2015年10月／1500円(税別)

SEALD<sup>S</sup> について「彼らは、その属している大学などの組織の中では少数派だ」と評価を低める向きがある。しかし歴史をひもとこう。江戸幕府の支配体制が、一面では末期的な姿を晒しながらも、世の大勢は圧倒的に“現状維持”“変わりっこない”と思われていた時。下関で高杉晋作が80人で決起したことが、明治維新の嚆矢となったという(勿論いまと状況は異なるだろう)。

彼らは本書で言う。「たとえば『日本社会が終わってる』ってなったときに、みんなどうして終わってるかを解説したがるんだよね。」「ネガティブなことを『こういう理由で、やっぱりネガティブです』って言うてもしょうがない。だからその逆で『本来こうあるべきです』と。で、こうやったら、もしかしたら変わるかもしれない。」「『とりあえず、やってみましょう』って」。

本書にはメンバーの何人ものスピーチや主張、政策的提言や対談等がおさめられている。国民主権“憲法第12条の”国民の不断の努力”とはどういうことか、若者が自分の言葉で語っている。

編修・発行 実教出版株式会社 代表者 戸塚 雄次

2016年9月20日 印刷 発行所 〒102-8377 東京都千代田区五番町5 Tel.03-3238-7777

2016年9月26日 発行 <http://www.jikkyo.co.jp/>